近世女性漢詩人原采蘋の漢詩研究

―旅の視点から―

柯　明

論文概要書

本論文は、江戸後期の女性漢詩人の原采蘋を研究対象とし、その文学表現における特徴を中心に考察したものである。

原采蘋（一七九八～一八五九、名は猷（みち））は、筑前秋月藩の儒者・原古処の長女である。幼年から漢詩文の教育を受け、「不許無名入故城（名無くして故城に入るを許さず）」という父の遺訓を胸に秘め、詩人としての名声を高めるため、二十八歳で、単身郷里を離れて以後、幾度も長旅に出て、当時の女性詩人としては極めて珍しく生涯の大半を孤独な旅に過ごしながら、漢詩を作り続けた。彼女は他郷にあって多くの名士と交流しつつ数多くの詩を作った。現存する詩は七〇〇首余、うち五〇〇首余が旅の最中に作られた詩である。

日本では古来、豊富な女性文学の伝統がある。俳句・和歌・散文・物語などの多様な作品が女性の手によって残されてきたが、重要な文学ジャンルである漢詩を作った女性漢詩人の数は多くない。漢詩の高峰を迎える江戸後期においては、漢詩を作り、詩集を残した優れた女性漢詩人が一定数現れたが、多くは花鳥風月を好んで漢詩に詠んで、いわゆる閨秀詩人の域を出ない。その中、原采蘋は旅の経験を生かして漢詩に詠み、江戸女性詩人において最も独特な一人であると言える。同時代の女性漢詩人、江馬細香や梁川紅蘭と比べると、采蘋の行動半径はるかに広大で、その詩風も男性詩人と同様の骨格の太さを備えて、閨閣詩人特有の線の細さはほとんど感じられない。

現在の日本では、男性を中心とした江戸漢詩の研究は盛んになっているが、資料の不足・作品の散逸等が原因で女性漢詩人に対する研究はまだ十分でないのが現状である。郷土史・伝記論またはジェンダー論の視点からの研究は見られるものの、本格的に女性漢詩人が作った作

品そのものに着眼し、文学的な視点から行った研究は立ち遅れていると言える。詩文の解釈も多くその創作背景の説明に止まり、漢詩そのものに対する具体的な分析は少なく、総じて、原采蘋の文学本体の研究としては不充分である。本研究は単なる作者論の角度のみならず、表現論の手法を通じてテキスト分析を行い、これまで見逃された視点から研究の不足を補足したいと考えている。

本研究の目的は、江戸後期、未知の世界に向かって当時の旅の困難を乗り越え、旅路に就いた原采蘋がいかにして自分の生活と思いを漢詩の世界に描いているのかを分析し、旅体験によって、彼女の漢詩にはどのような変容がもたらされたのかを解明することにある。また、原采蘋の遊歴生活と漢詩創作に焦点を当てて、詩歌作品を読み解くことによって彼女の文学の特徴を明らかにし、漢詩人として卓越した才能を持ちながら、正当な評価を受けなかった原采蘋の漢詩人としての再評価を試み、彼女の文学の独自性を解明できることを目指している。また、歴史を縦軸とし、周囲人物を横軸とした立体的分析によって、当時の文壇と時代に采蘋を新たに位置づけることを目指している。

以下、各章の内容を具体的に紹介する。

序章は先行研究を整理し、本研究の視点と独自性について述べた。特に課題を以下の二つに設定した。第一に、原采蘋の漢詩に対して、今までの伝記研究の視点ではほとんど行われていない文学的考察をすることである。表現論の手法を通じて、詩作そのものに着目して彼女の文学特徴を明らかにし、また、原采蘋を中心に、彼女の幼馴染である亀井少琴、親密な交遊を結んだ梁川紅蘭、同時代に活躍した江馬細香等の同時代の女性詩人との文学交流に注目し、彼女らの文学の特色を比較することによって、原采蘋の文学の特徴を明らかにし、これまでの研究の不足を補足する。次に、同時代の近世東アジア（日本・中国・朝鮮）における女性文学の全体像を概観し、彼女たちの創作を同時代に共通した文化現象の一部として捉える。また女性漢詩人によって旅の詩が作られた現象に注目し、新しい時代の刺激を受けて目覚めた女性文学者たちが「旅」を女性の社会的束縛からの解放と理解していた実相を明らかにし、その中に置かれた原采蘋という「旅の詩人」の誕生における可能性・必然性について考察する。

第一章「江戸後期の女性漢詩人原采蘋」は、江戸後期の漢詩壇の状況と時代特徴について概観し、その中、采蘋の生涯と遊歴の概況について紹介した。

第一節「江戸詩壇の状況」は当時の女性詩人の出現と様々な詩風の並立について述べた。

第二節「原采蘋の生涯」では、采蘋の遊歴生活を大きく、①父母と同遊する時代、②一回目の単身の旅、③二回目の江戸へ向かう旅とその後の江戸滞在、④晩年の九州各地の遊歴、という四つの段階に分けた。彼女の文学表現に対する考察は、そのような独特の人生の軌跡に沿って行わなければいけない。

第三節「原采蘋の詩風とその誕生」では、采蘋の詩風を時間順に分けて、幼年期に受けた教育、初期作品に反映される詩風、また旅路に就いた後、様々な刺激を受ける中で詩風に現れた変化に対して分析を加えた。采蘋は二十代まで父を師として勉学し、唐詩風を基礎としたが、後はその時代の風潮に乗った詩人たちの影響を受けながら、自分の独自の詩風を確立してきたと考えられる。

第四節「旅人としての形象」では采蘋が残した遊歴詩の概況について考察し、詩作から見る采蘋の「旅の詩人」としての自意識について検討した。采蘋の詩作において、唱和詩・応酬詩・離別詩などのジャンルが大きな比重を占め、「遊」「旅」「客」などを含む詩語も多く現れている。このような詩句を中心に、特に旅の抒情に深く関わった詩語を分析し、最後に、「故郷」を「他郷」に投影するという特徴的な望郷の図式について分析を加えた。

第五節「同時代の女性詩人江馬細香・亀井少琴・梁川紅蘭について」では采蘋と関わりのある数人の女性漢詩人を取り上げ、彼女たちの生涯と作品をめぐって、相互の交遊の実態を整理し、采蘋との比較を試みた。その結論として、原采蘋は平均的な女性詩人の枠組みを遥かに越えた個性ある詩人であることが判明した。

第二章「詩歌における風景の見方と旅の感覚―植物描写を中心」では采蘋の詩歌における風物、特に漂流・離散・遷移の感覚を表現する柳・楊花・萍等の植物を取り上げ、それらの詩語から見る采蘋の詩風の特徴と変化について論述した。

第一節「植物の詩語から見る遊歴の感覚」では、同時代の女性漢詩人との対比を通じて采蘋の詩における植物描写の独自性を明らかにした。題材からみると、一般的な女性漢詩人はいわ

ゆる花鳥風月の美的な景物を愛好し、具体的には桜花・水仙・梅・桃李等の花草を多く詩に詠む。しかし、原采蘋の詩にはそのような美的景物として評価の安定した花や草を取り上げる例は非常に少なく、花鳥風月のいわゆる文人趣味には属さない景物、またとりわけ揺れたり漂ったりする不安定なイメージを持つ景物の描写が目立って多い。そこには旅人としての独特な感覚が反映されていると考えられる。具体的に、無根の「蓬」・単身漂泊を意味する「萍」・自分の放浪する生涯を喩えて詠む「柳絮」と「楊花」などの具体的な詩語を取り上げて、詳細な分析を加えた。さらに、「兩斷蓬」（陸游の造語）などのような詩語の使用から、采蘋詩における宋詩に対する受容も確認した。

第二節「原采蘋の柳について」では、采蘋の詩に多く現れる「柳」の語を取り上げて分析した。采蘋の詩作における「柳」について、当初は単なる景物であったが、遊歴の生涯の中で離別の情を表すものへと特化し、次第に表現に一定の様式化が見られるようになった。このような植物描写における手法の成熟から、采蘋の自己の詩風の確立と漢詩人としての成長を見て取ることができる。

第三節「『芳草』と一般化した『花』」では、補足として、実物描写でなく象徴的な意象として詩の全体の主題を引き出すのに用いられた「芳草」と「花」という詩語について分析した。采蘋の詩で漂泊の思いを話して「漂っている」植物の詩語が大勢を占める中、これらの詩語は、ひときわ異色を放っている。

第三章「舟表現から見る旅中の視線と動線」では、原采蘋の「表現論」研究の一環として、同時代の他の漢詩人と比較することによって、「舟」表現の使用における采蘋の独自性について考察を加えた。舟旅の場合、いつもの生活空間を離れ、水上における空間の広大さや移動の動線を身近に意識することができよう。采蘋の詩において、「舟」表現の多用もおそらく彼女の中に内在する遊歴意識を反映していると考えられる。

第一節「采蘋詩における『舟』の詩題分類」では既存の羈旅詩・山水詩・景物詩などの分類を踏まえ、原采蘋の舟詩を描写内容と題材について分類し検討した。この結果、使用場面において、詩中の「舟」は多様性を示していることが確認できる。

第二節「采蘋周辺の詩人にとっての『舟』」では、原采蘋と密接に関係している詩人を取り

上げて、詩作の題材・詩作内部における視点から舟詩を具体的に比較した。同時代の頼山陽を始めとする漢詩人は主に「舟」を日常的な移動手段として即物的に捉え、舟詩において「記事」「紀行」また「見物の記録」の性格が強いのに対して、采蘋の場合、行旅に限らず、舟が取り上げられる場面は多岐にわたり、彼女が自覚的に「舟」を詩の核心的な素材として昇華させようとする姿勢が窺える。しかも、「舟」を単に交通手段と位置づけて、関心をもっぱら目的地に集中するのではなく、むしろ旅の途中における空間の移動に采蘋は詩的興趣を見出して、それを細緻に観察している。

第三節「采蘋詩に現れる『舟』の形成過程と表現の成熟化」では、采蘋詩に現れる「舟」の形象とその多様性がいかに成り立ったのかについて考察した。遊歴の生涯とともに、采蘋詩における「舟」表現に現れた変化について代表的詩例を時代順に整理・分類することによって、（Ⅰ）自分の生活体験から遊離した観念的景物、（Ⅱ）舟旅の実体験に基づいた具体物、（Ⅲ）自分の漂泊の姿と一体化した観念の形象、というように時期を逐って変化が見られる。

第四節「中国古典に対する受容からみる『舟』」では、主に中国の文学伝統における「舟」表現に遡り、受容の角度から采蘋詩における「舟」の原点について考察を加え、先行研究の補足を試みた。采蘋の詩作に用いられる「夜泊」の題材、「孤舟」「扁舟」などの詩語、そして舟と酒の組み合わせから、中国古典、特に杜甫詩また宋詩に対する広範な受容が窺える。

第四章「旅における時間意識―その表現と特質」では、采蘋が屡々詩に用いる時間表現、さらに詩作に反映される時間意識について考察した。采蘋は日本の各地を遍歴しながら一生を送り、詩に描かれる風景、またその中を流れる時間の表現にも確実な変化が見られる。

第一節「采蘋の詩における時間の諸相」では、采蘋の詩において、遊歴生活・時間の経過について語る表現が格別に多いことを明らかにした。次の第二節「明確な時間表現」と第三節「文学表現としての時間」はそのような時間表現を二種類に分けて考察を加えた。

第二節では、采蘋の人生の軌跡と思想形成の四段階に沿って、詩作における数字を用いた明確な時間表現について考察した。采蘋の旅に出る前の詩において、時間の表現は少なく、旅に出ることによって、時間に対する感覚も徐々に変化し、より鮮明な形になってきたことが確認できる。さらに、前期の詩に屡々現れた「帰心意識」そのものが、五十代から六十代の後期の

詩において、両親の死去によって帰る場所としての故郷が失われるとともに消滅したことを確認した。

第三節では、漢詩創作の面において、采蘋にとって重要な文学素材である「時間」について考察した。采蘋が用いた時間表現は、人生ある時点の生活を即物的に記録する方法となるだけではなく、感情表現の方法としても次第に変化に富んでいく。月の満ち欠けで時間の流れを暗示したり、将来への思いを現在と対照しながら語ったりするように、采蘋は意識的に「時間」を文学の素材として、様々な手法を試しながら詩に詠み込んだことが分かる。

第四節「交流のある詩人たちとの対比」では、同時代の諸詩人、特に女性詩人との比較を通じて、采蘋の詩における時間表現の独自性について考察した。旅の経験に刺激されることで、采蘋の時間の経過に対する敏感さは、「春を傷む・老いを嘆く」などの一般的な表現類型を超越する。旅の実体験から生じた切実な感情が詩に詠み込まれ、かつ時間の経過がその感情をより切実なものへと駆り立てることによって、詩の世界は大いに拡張されることになる。

第五章「近世東アジアの中の女性漢詩人原采蘋―行動する女たちの旅と文学」は、考察範囲をやや広げ、采蘋と近い時期に生きた中国の鮑之蕙（一七五七～一八一〇）、朝鮮の金錦園（一八一七～一八八七以降）を視野に入れ、旅の視点から、三人の女性詩人の紀行・羈旅詩について考察を行った。三人は生存時期が重なり、漢詩という相共通する文体によって自らの旅の体験を個性的に詠じたことは興味深い。

第一節「詩名向上と詩芸研鑽の旅―日本・原采蘋の場合」では、原采蘋の旅の様態と動機について検討し、具体的な詩例に対する分析を通して、彼女の旅の動機――「詩名を挙げる」ということについて明らかにした。第二節「日常からの離脱と伉儷遊山の旅―清・鮑之蕙の場合」は、袁枚の随園女弟子の一人である鮑之蕙の生涯と時評につい紹介し、（明）清時代における女性の旅の概況を整理した。題材的に、紀行詩が占める割合が極めて大きいという鮑之蕙の詩の特徴は、袁枚の他の女弟子のみならず、清代全体の女性詩人にあっても類例を見出せない希有な現象である。その中、物見遊山の観光を目的とする行楽の旅の詩が数多くあるが、純粋に行楽の悦びを追求するにとどまらず、「清遊」「鷗鷺」「忘機」「遊仙」「偕隱」等の詩語の頻用には、彼女の隠遁に対する憧れや願望が託されている。

第三節「人生一度きりの冒険の旅―朝鮮・金錦園の場合」では、李氏朝鮮の金錦園が著した旅行記「湖東西洛記」とその間に鏤められている計二十六首の漢詩を取り上げて分析を加え、女性に対する規制を突破し、旅を通じて「知見を広げる」という錦園の目的を明らかにした。彼女の文学において、旅に関わる中国古典の著名な故事や名句にしばしば言及し、訪れた先の景観や口に食した名産を、中国古典によって著名になった名勝名産と比較して決して見劣りしないといったように強調する話法が特徴的である。

第四節「三者の異同―旅の形態と内面から」では、三人の詩作を比較し、具体的な描写の仕方における相違点及び三者の旅の特質について検討を加えた。「東アジアの女性詩人」と「女性と旅」という二つの視点から、原采蘋の位相を考えてみると、彼女は近世東アジアの女性詩人の誰よりも自立を志向した点で、最も近代に近い地点に立つ一人であり、きわめて独自性の高い詩人だったという結論に至った。

第六章「江戸女性漢詩の出現―その『育成』に関する一考察」は、なぜ近世の江戸期に至って、原采蘋をはじめとする女性詩人が輩出したのかについて、その「育成」という角度から考察を行った。

第一節「文学の出発点-女性漢詩人を育てた家庭」では、女性漢詩人たちを育った私的空間である家庭環境、漢詩と接触する経緯、文学創作の拠点としての書斎などの方面から考察を加えた。近世後期に、自由な精神を持つ女性の文学者たちが現れることになるが、漢詩について見れば、その範囲は儒者・医者そして富商などの恵まれている家庭に限られており、また、父親や夫からの理解と支持と恩恵を受けて漢詩の道を歩むことができた例外的な女性たちだったことが分かる。

第二節「交流の場と育成者」では、女性詩人を育成する社会的な教育態勢について、開かれた交流の場としての「漢詩サロン」、さらにはその時代の代表的な女性詩人の育成者（大窪詩仏と頼山陽）を中心に、彼らの女性詩人に対して行われた育成の活動と指導方針について具体的に考察した。その時の「漢詩サロン」では脱「因襲」・脱「身分」化が進行して、その延長上に女性が公開的舞台に登場する機会がもたらされた。また、女性漢詩人の育成者たちについては、大窪詩仏が袁枚の文学観・女性観を日本に紹介し、頼山陽は、その観念を女弟子の育成

によって積極的に実践した者と見なしてよい。

第三節「詩集の出版」では、江戸後期を生きた女性漢詩人の個人詩集の出版に対する態度、そして彼女たちの背後にいた推進者について考察した。詩集の出版は、自己の詩業の総体を誤りなく後世に伝達しようとする行為であり、詩人としての最も正当な欲求と言っても過言ではない。しかし、江戸時代において、男性詩人にとってごく当然の願望である詩集の出版も、多くの女性漢詩人は諸々の理由により敬遠していた。江戸後期に顕著な現象となる女性漢詩人の登場と、その一方にある彼女たちの漢詩集出版の低迷は、当時の女性漢詩人の置かれた社会の複雑な状況を写していると言える。

第七章「自由人としての頼山陽と袁枚―その女性観の形成を中心に」は前章の延長線上で、女性詩人の育成者の中にあって、特に「儒教的正統文学観」を蔑視するという点で共通し、自由な表現者を目指す清朝の袁枚と頼山陽を取り上げ、彼らの女性観の特徴と育成の実践について論じた。先行研究では、当時の江戸の「袁枚流行」とそれが頼山陽に与えた影響についてすでに指摘されているが、家庭環境と家族内部の女性からの影響という視点から、両者の女性観の形成について考察するような研究はまだなされていない。

第一節「頼山陽と袁枚について」では、二人の生涯と旅行体験を整理して、彼らが共通にもっている「脱制度」の自由精神について考察し、また、山陽の袁枚に対する複雑な評価の実態に注目した。

第二節「家庭内部の女性との関係」では、二人の女性観を醸成する家庭環境を考察し、特に山陽における母の静子の存在、袁枚においては反骨精神と伝統的秩序への懐疑に影響を与えた叔母の沈氏、才能を持っているが不幸な運命を辿っていた「袁家三妹」などを取り上げて具体的に検討した。

第三節「女性観の具体的様相」では、主に袁枚に注目し、「才」と「節」に対する考え、「性霊」と女性観の繋がりなどの方面から彼の女性観について考察しつつ、山陽との比較を試みた。また、二人とも女性の才能を重視する姿勢を示したが、彼らの女性観における限界についても考察した。しかし全体から見ると、袁枚と彼の影響を受けた頼山陽は女弟子に対する指導や詩会・詩社の開催などを通じて、女性文学者の進出と活躍を促す機運を拓いた。彼らの周囲には、

文学趣味と知的自由を求める女性たちが集まり、彼らの影響の下に才能を開花させた。結果として、袁枚と頼山陽は近世の女性文学者にとって無二の育成者となったのである。

第八章「原古処の『読源語　五十四首』における語義の二重性について―日本漢詩における『掛詞』」は補足の一章で、采蘋の父親の原古処（一七六七～一八二七）が采蘋に書き与えた「読源語　五十四首」を取り上げて考察した。古処は儒者であり、特に漢詩に才能を発揮して娘の采蘋を漢詩人として育成したが、一方で、国学にも造詣が深かった。「読源語　五十四首」とは、『源氏物語』の各巻を五言絶句に詠じた連作漢詩のことで、当時において、頼山陽を通じて、江馬細香の文学創作にまで影響を及ぼした。古処の詩作において、和訓を巧妙に活用することで、二重性を帯びた極めて特徴的な表現が見られる。この章では、このような語義の二重性を帯びた「掛詞」の技法・特色に重点を置き、物語の展開を踏まえた上で、古処の漢詩作品における創作意図、及び国文学と漢文学との関係性に対する考え方について考察を試みた。具体的に、漢字漢語の「掛詞」と物語の解釈における二重性という二つの面に分けて、用例を取り上げて精密に分析した。采蘋の場合、残念ながらおそらくは資料の散逸などが原因で、源氏を詠じた漢詩は今のところ見当たらないが、「采蘋に書き与ふ」という識語と、『源氏物語』における女性の生き方に対する考えが込められた古処の詩作には、娘の采蘋に対するメッセージも含まれていると考えられる。これは最終的に、娘が自立した一人の漢詩人として生きようとする思いを鼓舞したことであろう。

終章「近世文学史における『旅の詩人』原采蘋像」では、論文全体を振り返り、采蘋の旅にはどのような意味を持つのかについて考え、結論をつけた。

まず、第一節「江戸時代の旅」では、江戸の旅をめぐって、当時普遍的な社会環境と旅の実況について紹介した。

第二節「女性の旅と文学」は女性の旅が直面する様々な困難について明らかにし、「女芭蕉」と呼ばれる俳人の田上菊舎、大垣から京都までの旅は馴染んでいた江馬細香、また夫の梁川星巌に随行して旅していた紅蘭の作品を取り上げて考察した。しかし、同時代の女性漢詩人に比べて、采蘋の場合は旅の規模が大きく、その上、女性単身の旅という形も当時においては非常に稀なことであった。最も注目すべきは、采蘋の詩業全体において「旅」が重要な地位を占め

ている点であり、同時代の女性詩人たちの中で唯一「旅の文学」と定義してよいのは采蘋の文学のみである。結論として、采蘋は、江戸時代の日本にせよ、同時代の東アジアにせよ、同時代の平均的女性詩人の枠組から大きく外へ踏み出していることになる。

第三節「采蘋にとっての旅の意義」では、「旅の詩人」としての采蘋の全体像に迫り、采蘋の旅における様々な要素を見出すことができた。遊歴の経験を重ねるとともに、采蘋の作詩の技巧も円熟し、詩語の複雑化・様式化などの工夫を見て取ることができる。旅によってもたらされた複雑な時間・空間意識の中で、新しい心理状態への転化も詩に現れるようになる。旅人として出発した後、旅路の中で挫折も感傷も味わい、故郷への募る思いも強かったが、両親を喪う中で、自分を捉え続けていた「帰心意識」そのものが消滅して、采蘋は生まれ変わって新しい人格を獲得したように、旅を楽しむ余裕もしばしば詩に描くようになる。采蘋の旅は、彼女の「人格」の開始と持続と、そして完成の物語なのであり、つまり、旅こそが采蘋の人生だった。

最後に、社会的視点から見ると、采蘋の場合、当時の社会的制約の中で、また特に女性の置かれた環境の中で、まだ完全に自由独立を果たすことは困難だった。とはいえ采蘋は、旅という実践を自己に課すことによって、身辺の閉鎖的で小さな現実と人間関係から脱出し、漢詩人を目指して当時の束縛を破ろうとした。それはある意味で、近代的自我の確立を求める苦闘にほかならず、女性史的観点で多大な意義を持っている。

今後の課題として、本研究で初歩的に考察した、近世東アジアの女性漢詩人の文学における共通点と相違点について、さらなる詳細な研究が必要だと考える。またこうした研究は、将来の女性の生き方・女性文化の在り方についての問題提起を含んでおり、ここを起点に女性史研究の新たな研究の可能性も開けるだろう。今後の江戸漢詩研究の領域において、本研究が一石を投ずることになることを期待したい。